

祖母の語りからとらえる祖母性についての一考察

佐伯いつみ

（首都大学東京大学大学院人文科学研究科）

【問題と目的】現代の家族形態として、数年前までは核家族化が進み、子育ては母親が一人で担うものとされてきた。しかし、とくに幼い子どもを持つ共働きの夫婦にとっては、経済的安定をはかるために、自分たちの親に子どもの世話などの支援を求めることは少なくはないといえるだろう。祖父母研究において、とくに近年増えつつあるのが祖母を育児支援者としてみる研究であるが、祖母であることの実証的な研究はきわめて少ないのが現状である。祖母のさまざまな感情や個々の状況をふまえたうえで、祖母が孫育てをどのようにとらえているか質的側面で検討していく必要があるだろう。では、実際に祖母はどのように孫育てに参加しているのだろうか。また、孫育てへの参加を祖母はどのようにとらえているのか。さらに、本研究では祖母の主観的な体験の報告にもとづき祖母であること、すなわち祖母性を検討するための試論としてことを目的とする。

【方法】調査対象者：孫を持つ祖母 21 名（平均年齢 69.29 歳）であった。本研究では、同居・別居といった生活の形態や、内孫・外孫といった血縁関係、孫の年齢についての制限は設けないこととした。手続き：インタビューは、あらかじめ用意した質問項目に準じながら、半構造化インタビューを行った。インタビューの全行程は協力者の承諾を得て、ICレコーダーで録音した。インタビュー終了後逐語録をつくり、分析のための資料とした。

インタビューの内容：①孫の誕生による変化について②子育てと孫育ての違いについて③印象的なエピソードについて④孫のイメージについて⑤祖母のイメージについて⑥周囲の変化について、以上の質問を軸として孫とのかかわりを自由に語ってもらった。

本研究では、孫育てにかかわる 326 エピソードが得られた。孫とのかかわりを通して、祖母たちがどのように、孫育てを意味づけているかを検討するために、新たな枠組みを生成し分析を進めることとする。本研究では、すでにある理論やすでにある分析基準から逐語録の分析を行うのではなく、協力者の語りの逐語録そのものから分析の視点や観点を抽出することとする。

【結果と考察】祖母たちが語った物語が孫育てをどのようにとらえているか、それぞれのカテゴリーから、個々のエピソードを質的に検討した。

語りのテーマ 以下の 4 つのカテゴリーと 10 の概念から構成された。

カテゴリー	概念
異なる様式の受容	・自身の過去の経験の受け入れ ・孫、親の受け入れ ・孫、親からの受け入れられ
経験の賞玩	・情緒的な体験の記憶 ・情緒的な記録の保管
誤つと調整	・孫の成長への不安 ・育児場面でのルール違反 ・家族内での関係の調整
他者との比較	・祖父との比較による自負 ・周囲とのかかわり

語りの検討から、祖母は孫と関わることを積極的に楽しみ、他者とのかかわりの中で、祖母という自信や自負を持つことによって祖母の孫育ての意味づけがなされていると考えられる。そして、祖母が孫育てに参加し、継続的にそれがなされる背景には、孫とのかかわりだけではなく、祖母自身に内在する過去の体験の乗り越えや、孫や子ども夫婦の心的側面の理解に加えて祖母であることを受け入れている家族があるということが示唆された。以上のことをふまえると、子育てに参加している祖母が体験している経験は、養育者という側面はありつつも明らかに母親とは異なるものだといえる。祖母は「二重的な子育て」を行なっているともいえる。そこには、孫が生まれる以前の母親期があり、孫が生まれてからの母親期とそこに重なり祖母期が存在する。そこに母性とは異なる祖母性を検討できる可能性があるのではないだろうか。